

セッション番号	タイトル	研究分野	研究対象海域	キーワード	代表コンピナー	趣旨	共同コンピナー
16S01	北極海環境変動	複合領域	極域	北極海／海水減少／物質循環／生態系	渡邊英嗣 (JAMSTEC)	近年、北極海環境変動は自然科学の研究者だけでなく、社会からもかつてない注目を浴びつつある。ここ10年のスケールでも北極海の温暖化・淡水化・貧栄養化・酸性化などが報告されており、急速に進行する海水減少の実態解明および海洋生態系への影響評価は全球規模の気候変動や水産資源の将来を予測するためにも喫緊の課題となっている。本セッションではGRENE(2011-2015年度)やArCS(2015年度～)はもちろんのこと、そのような大型研究プロジェクトに限らず多種多様な研究実施体制の下で得られた最新の知見について情報共有するとともに、分野(物理・化学・生物)や手法(観測・データ解析・モデル)の枠に捉われない学際的な観点から北極環境研究の将来展望を議論することを目的とする。	野村大樹(北大水産)、 三瓶真(広島大院生物圏科学)
16S02	中緯度大気海洋相互作用	境界・複合領域	亜寒帯域、亜熱帯域、太平洋、インド洋、大西洋、オホーツク海、ベーリング海、日本海、東シナ海、内湾・沿岸域、瀬戸内海、親潮域、混合域、黒潮	大気海洋相互作用、中緯度海洋、海洋前線、海面水温	杉本周作 (東北大学際科学研究)	中緯度海洋域は、亜熱帯循環に伴う暖流と亜寒帯循環に伴う寒流により強い水温勾配をもつ前線帯が形成される領域であり、かつ大気への熱放出が活発な領域である。近年、衛星観測や現場観測、高分解能数値モデルにより、中緯度域の海洋が熱放出や水蒸気供給を通じて、様々な大気現象に影響することが明らかになりつつある。そこで、本セッションでは、中緯度域の海洋・大気現象に注目し、メソスケール現象から海盆規模の現象、数日規模変動や季節変動から温暖化などの長期変動にいたるまでの幅広い時間・空間スケールの研究成果を発表していただくことで、大気海洋相互作用系の理解を深めたい。また、大気海洋相互作用研究の今後の発展や展開を見据えるために、雲やエアロゾル、生態系の観点からの発表を歓迎する。	佐々木克徳(北大院理)、 西井和晃(東大先端研)、 東塚知己(東大院理)、 大石俊(東大院理)
16S03	亜熱帯-亜寒帯循環境界の物理・生物地球化学過程	境界・複合領域	混合水域、亜寒帯域、亜熱帯	風成循環境界、物質輸送、生物動態	三寺史夫 (北大低温研)	北太平洋における亜熱帯循環の北縁である黒潮続流前線と亜寒帯循環の南縁である亜寒帯前線の前線間海域は、風成循環の境界であるため、黒潮系の海水と親潮系の海水が入り組み複雑な海況を呈する。しかしながら、近年になって、準定常的な海流とそれに伴う再循環流やモード水の存在が見出されるなど、複雑さの中における秩序的な構造が明らかとなってきた。北太平洋では上記の前線間海域を通し熱塩交換やさまざまな物質・生物の輸送が活発に起こっており、大規模な海洋循環や海洋生態系、および気候系に様々な影響を与えている。本セッションではこのような循環境界域の海洋を、物理・生物地球化学過程の視点から複合的、総合的にとらえることを目的とする。また北太平洋に限らず、大西洋や縁辺海等、他の海洋における循環境界域の物理・生物地球化学過程に関する知見も本セッションの対象である。	伊藤進一(東大気海洋研)、 鈴木光次(北大院地球環境)

16S04	インド-太平洋域の物理、生物地球化学と気候変動	複合領域	熱帯域、太平洋、インド洋	気候変動、生物化学過程、相互作用、IIOE-2	ベヘラ スワディヒン (JAMSTEC)	インド-太平洋域はENSOやIOD、ニンガルーニーニョ、カリフォルニアニーニョといった大規模な大気海洋相互作用現象が発生し、海盆スケールから領域スケールの気候変動現象が卓越する海域である。そうした気候変動現象は全球規模の気候や気象パターンおよび海洋の生物生産に変化をもたらす、社会的な影響が大きい現象である。しかしながら、物理的、生物地球化学的あるいは気候学的諸過程の関連性については未だ議論が十分でない状況と言える。そのような状況の下、インド洋では、SIBERとCLIVAR等による提案を元に2015年12月より5年計画でIIOE-2(第2回国際インド洋調査)が実施されており、得られる観測データは解析やモデル研究に有益な情報となるものである。当該セッションはこれらを念頭に、物理と生物地球化学の横断的な議論の場を提供するものであり、インド洋-太平洋域の物理/生物地球化学/生態系の表層過程、大気海洋相互作用、境界流/通過流、混合過程とそれらの間の相互作用、現象の予測可能性などの多方面からの投稿(日英問わず)を歓迎する。更に、このセッションを通じてSIBER、CLIVAR、IIOE-2、Future Earth、TPOS等の国際的な議論/活動にも生かされる事を期待する。	津田敦(東大気海洋研)、安藤健太郎(JAMSTEC)
16S05	南大洋研究の新展開	境界・複合領域	全球、極域、亜寒帯域、インド洋	南極底層水、南極周極流、海洋酸性化、日本南極地域観測	大島慶一郎(北大低温研)	南大洋では底層水が生成され、それが全海洋の底層に潜り込み、海洋大循環のパターンや強度を規定する。また、南大洋は、二酸化炭素の最大のリザーバでもあるので、数百年-数万年スケールの全球気候を決める最重要因子の一つといえる。現在、南大洋域では、南極底層水生成の弱化、西南極での氷床融解の加速、二酸化炭素増加による海洋酸性化など、全球環境変動をももたらす重大な変化が報告されつつある。日本南極観測の重点研究観測では、海洋酸性化と生態系の研究が展開され、来年度からは氷床・海洋相互作用に着目した重点研究観測が始まる。本セッションでは、学際的な視点での議論を促し、それを活かすような観測計画が醸成されることも期待して、海洋物理・化学・生物から、古海洋、水産、雪氷、気象まで様々な分野から、境界領域の研究まで含めて南大洋に関わる講演を募る。	池原実(高知大コア研)、茂木正人(東京海洋大)、田村岳史(極地研)
16S06	東南極季節海水域縁辺における生物過程	生物	極域	東南極、季節海水域、海水縁辺域、極域生態系	谷村篤(極地研)	東南極海域は、南極半島周辺の西南極海域とくらべて観測データが乏しい海域であり、南極海の生態系を構成する生物群の情報も多くはない。こうしたギャップを埋めるべく、今世紀に入って、国立極地研究所と東京海洋大学は、オーストラリア、フランスなどとの共同で、「海鷹丸」、「しらせ」、オーストラリア南極観測船「オーロラ・オーストラリス」を用いて、Lützw-Holm 湾沖やWilkes Land沖の季節海水域で精力的な観測を行ってきた。とくに、夏季の海水がもつとも後退する海水縁辺域での観測では、多くの知見が得られてきた。本春季大会では、標記のようなセッションを設けて、これまでの成果を俯瞰・総括し、今後の東南極域における海洋生態系研究の意義を共有し、当該海域での研究のさらなる発展を目指す。	小達恒夫(極地研)、茂木正人(東京海洋大)
16S07	数ヶ月から数年先の気候変動予測と海洋の役割	物理	全球	気候変動予測、大気海洋相互作用、テレコネクション、大気海洋結合モデル	土井威志(JAMSTEC)	数ヶ月から数年先の気候変動予測には豊かな社会応用の可能性があり、その高精度化には熱容量が大きくゆっくりと変動する海洋の予測が重要である。そこで、気候変動予測の精度向上に資する海洋研究の重要性を明らかにし、今後の発展を考える機会として、本セッションを提案する。大気海洋相互作用を伴う気候現象(熱帯、中高緯度域を含む)や、その遠隔影響(テレコネクション)、それらと密接に関連する海洋変動についてのトピックスを中心に、予測の基盤となる理論的な側面(観測やモデルによるプロセス研究)と技術的な側面(大気海洋結合モデル、データ同化システム、アンサンブル予測手法の開発等)からの発表を歓迎する。	藤井陽介(気象庁気象研)

16S08	実用的な海洋の予測システム	物理	特になし	予測システム、逆問題・データ同化、実用的予測、予測のための計測	稲津大祐 (東大海洋アライアンス)	海洋の物理シミュレーションの高精度化により、それを基盤とする予測システムが現実的・実用的となってきた。予測の対象は、波浪、津波、潮汐、高潮、急潮、海洋循環(との中長期変動)など多岐にわたる。これらの現実的・実用的な予測結果が、沿岸近傍の社会に始まり、漁業・海事、および、漂流物・汚染物質拡散の予測など、経済・安全・環境などの多面的な観点から求められている。このセッションの目的は、現象・対象ごとの予測システムの開発と、その高精度化・高速化の推進を含めた実運用・利用を展望する議論を行うことである。予測シミュレーション(順問題)手法、採用する逆問題(データ同化)手法、および、効果的な予測のための計測・モニタリング手法など、予測システムにおける重要なプロセスの技術開発に加え、実利用を意識したテーマ・発表を期待する。これまで対象とする現象ごとに議論されがちだった予測システムの開発・運用を、別の現象の研究者側の意見も取り入れ議論する場となることを期待する。	中田聡史(神戸大院海事科学)、 阿部祥子(日本海区水研)、 宮澤泰正(JAMSTEC)、 広瀬直毅(九大応力研)
16S09	地球温暖化に関する分野横断の海洋研究	境界・複合領域	全球、太平洋、日本海、東シナ海、オホーツク海	気候システム変化、物理環境変化、化学環境変化、生態系変化	見延庄士郎 (北大院理)	地球温暖化および関連する人為起源の海洋変化により、海面上昇、海洋酸性化、海洋貧酸素化、海洋貧栄養化、そして大規模な生態系変化が生じることが懸念されている。これらの問題の多くで海洋の物理・化学・生物が関する複合的なアプローチが必要となるだけでなく、海洋表面水温や海水分布の変化が陸上気候にもたらす影響では海洋・大気相互作用が重要となる。したがって、海洋の地球温暖化問題にアプローチするには、海洋学の内外の分野の枠を越えた情報交換と連携とが必要である。そこで、本セッションでは、分野を超えた連携に資するために、地球温暖化に関する最新の研究成果と討議を行う。	伊藤進一(東大気海洋研)、 河宮未知生(JAMSTEC)、 栗原晴子(琉大理)
16S10	地球温暖化ハイエイタスと潜在的ブーストに対する海洋熱循環の役割	物理	全球	海洋循環、海洋熱吸収、ハイエイタス、地球温暖化	谷本陽一 (北大院地球環境)	温室効果気体の増加に伴う放射強制力は今世紀に入りなお増加し続けているにもかかわらず、2000年以降この15年間における全球平均気温の増加率はそれ以前と比較して小さく、地球温暖化のハイエイタス(一時停止)とされている。ハイエイタスの要因の一つとして海洋による熱の取り込みの役割が指摘されているが、どのような海洋循環がその役割を担っているか、どの海域からどの程度の熱の取り込みが生じているかにはまだ多くの議論がある。また、今後、海による熱吸収が熱放出へと転じた場合には、地球温暖化が加速する(潜在的ブースト)という懸念もある。本セッションでは、ハイエイタスに関連した海洋循環、大気海洋相互作用、海面熱フラックスなど海洋が関与するプロセスについて、数値モデリングや観測データによる診断などさまざまな研究アプローチの成果を踏まえ地球温暖化に対する海洋の役割を議論する機会とする。	鈴木立郎(JAMSTEC)、 岡頭(東大気海洋研)
16S11	高精度海洋観測に基づく長期変動研究とそれを支える計測分析標準の開発	境界・複合領域	全球	長期変動、高精度観測、品質管理、トレーサビリティ	内田裕 (JAMSTEC)	地球温暖化や気候変動にかかわる海洋の長期変動を正しく理解するには、高精度海洋観測による直接測定が不可欠である。その際に、異なる観測機関や複数の観測装置で得られた長期にわたる観測データの高度なトレーサビリティ(計量標準にたどり着き切れ目のない校正の連鎖で得られる不確かさが表記された測定結果)の確保が重要となる。本セッションでは、第一に船舶やArgoフロートなどの(データ同化を含む)観測データに基づく海洋の長期変動の研究と、第二にそのために必要な観測手法の標準化やデータ品質管理・トレーサビリティ確保のための研究という二つの視点から、海洋内部で何が起きているのか、検出した変動の信頼性はどの程度なのか、信頼性を高めるには何が必要なのかを議論することを目的とする。	中野俊也(気象庁)、 勝又勝郎(JAMSTEC)、 石井雅男(気象研)、 細田滋毅(JAMSTEC)、 青山道夫(福島大)

16S12	衛星海色観測による海洋生物圏研究：気候変動ミッションGCOM-Cの利用に向けて	境界・複合領域	全球、内湾・沿岸域	リモートセンシング、海色、海洋生物、GCOM-C	村上浩 (JAXA)	日本の海色ミッションである気候変動観測衛星(GCOM-C)が2016年度に打ち上げ予定であり、GCOM-Cに搭載される多波長分光放射計(SGLI)は1000km以上の観測幅で全球を観測すると共に250mの空間解像度により沿岸域での研究や応用も期待される。本セッションでは、海色データの特性に関わるプロダクトの推定手法、検証手法、誤差特性についての発表と共に、海色データ解析研究、現場観測研究、モデル研究などの発表を通じて、海洋生態系研究等における海色データの活用が促進され、今後多くの研究成果が発信されるための一助となることを目的とする。	虎谷充浩(東海大工)、平譚享(北大院水産)、鈴木光次(北大院地球環境)、平田貴文(北大院地球環境)、小林拓(山梨大生命環境)、作野裕司(広島大院工)、藤原周(JAMSTEC)
16S13	海洋学におけるデータ公開に関する試み	複合領域(地球情報科学)	全球	データセット、Web、可視化、オープンサイエンス	照井健志 (極地研)	海洋学において、観測や解析から得られるデータは膨大になっており、日々多くのデータが取得されている。その一方で、我が国における観測・解析データの第三者への公開については、積極的に行われていない。実際にはプロジェクト等で開発整備されたデータ公開基盤とWebサービスが存在するが広く知られていない。研究者個人の努力によりデータセットも公開されているが同様である。このセッションでは、海洋学に関するデータ公開基盤やWebサービス等について開発者からの積極的な紹介を行い、研究者への宣伝の場としたい。新たに作成されたデータセットやアプリケーションについても歓迎し、海洋学に関する研究者へ利用を促す機会としたい。	矢吹裕伯(JAMSTEC)、華房康憲(JAMSTEC)、菱木美和(JAMSTEC)
16S14	海面熱・運動量・淡水フラックスと海洋変動	物理	全球(海域を問わない)	現場観測、衛星リモートセンシング、海面フラックス、塩分変動	富田裕之 (名大宇宙地球研)	近年の人工衛星による全球地球観測技術の発達およびArgoフロートの展開に代表されるような海洋表層の現場観測網の拡充に伴い、海洋のほぼ全域で海面熱・運動量・淡水フラックス変動と海洋表層変動を同時に把握した観測に基づく議論が可能となりつつある。本セッションは、衛星観測に基づく海面熱・運動量・淡水フラックス推定に関する研究と、海面フラックスによって生じる海洋変動について、現場・衛星観測や数値モデルなど多様な手法に基づく研究の発表を募るとともに、それらの研究進展を支える技術やデータマネジメントに関わる研究者が同じセッションで話題を共有することで当該分野における将来の研究発展に資することを目的とする。	瀬藤慎也(JAMSTEC)
16S15	縁辺海における力学と生物地球化学過程	境界・複合領域	オホーツク海、ベーリング海、日本海、東シナ海、南シナ海、瀬戸内海	水塊形成、陸棚斜面上循環、物質循環、海域間相互作用	木田新一郎 (JAMSTEC)	ベーリング海からインドネシア海まで連なる西太平洋の縁辺海は日本及び東アジア諸国の海洋気候場の形成に重要な役割を担っている。近年、直接・衛星観測や高解像度数値モデルの発展により、縁辺海の循環場から生態系までその理解が急速に進んでいるが、これらの研究はまだただ個々の海域や分野の枠組みで議論されることが多い。本セッションは、この各海域で行われてきた観測や研究の成果や手法を共有し、互いの研究発展につなげるため、縁辺海というこれまでより大きい枠組みによるセッションを提案する。生物地球化学過程・生態系から水塊・循環場まで縁辺海で起きている様々な時空間スケールの現象の議論を深めることを目的とする。	井桁庸介(日本海区水研)、吉江直樹(愛媛大)
16S16	海洋中規模渦研究の成果と今後の展望	複合領域	全球、極地、太平洋、インド洋、大西洋、オホーツク海、ベーリング海、日本海、東シナ海、南シナ海、内湾・沿岸域	中規模渦、サブメソスケール渦、現場観測、モデル	齋藤類 (東大大気海洋研)	海洋は渦だらけと呼ばれるように、暖水性と冷水性、高気圧性と低気圧性の直径が約100~300 kmの中規模渦が全球的に存在している。近年の衛星観測技術の発達により、理論・現場観測、海洋及び低次生態系モデルを利用したシミュレーションによる研究が急速に発展し、渦の構造、時空間変動、生態系への影響について理解が進んでいる。本セッションでは海洋中規模渦に関する最近の物理、化学、生物研究の成果と今後の展望を発表、議論することを目的とする。本セッションは若手会員が提案するものであり、今後の海洋学を担う若手会員の発表を奨励する。中規模渦と相互作用が観察されているサブメソスケール渦に関する発表も歓迎する。	石山宙夢(北大院環境科学)、伊藤大樹(東北大院理)

16S17	内部波の力学と海洋諸過程における役割	物理	全球、極域、亜寒帯域、亜熱帯域、熱帯域、太平洋、インド洋、大西洋、オホーツク海、ベーリング海、日本海、東シナ海、南シナ海、内湾・沿岸域、瀬戸内海、親潮域、混合域、黒潮	内部波、乱流混合、乱流観測、数値シミュレーション	丹羽淑博 (東大海洋アライアンス)	内部波は海洋中のいたる所に存在する普遍的な現象であり、海洋の様々な物理・化学・生物過程に大きな役割を果たしている。例えば、外洋域の内部波の砕波が引き起こす乱流混合は、密度成層を維持し熱塩大循環を駆動している。また、沿岸域の内部波は、汚染物質や栄養塩の輸送・拡散をコントロールし、海洋生態系に大きな影響を与えている。近年は乱流測器の普及、新たな微細構造観測測器の開発、LESなど高解像度数値シミュレーションの導入により、内部波とそれに付随する乱流混合の時空間分布がより詳しく調べられるようになってきた。しかしながら、内部波による乱流混合、物質輸送・拡散の効果は大循環モデルや広域数値モデルにどのように組み込むかについて統一した見解はまだ確立されていない。そこで、本セッションでは、観測、数値実験、理論などから得られた内部波の力学とその海洋諸過程における役割について最新の研究成果を募集する。海洋内部波の理解がどの程度まで進んだのか確認するとともに、内部波研究の課題と今後の発展の可能性について議論したい。	古市尚基(国立環境研)、 田中祐希(東大院理)、 永井平(東大院理)
16S18	乱流混合と物理、化学、生物過程	境界・複合領域	全球(海域を問わない)	乱流混合	吉川裕(京大院理)	計測技術と数値計算手法の進展により、微細な規模の乱流混合と、それが大規模な物理・化学・生物過程に与える影響が着目されるようになってきた。例えば、海洋表層での乱流混合は混合層過程を通じて、表層-亜表層間の栄養塩供給とそれを介した基礎生産に、海洋内部での内部波の砕波に伴う乱流混合は密度面を横切る物質輸送や熱塩循環に関連している。このように海洋循環、物質循環、基礎生産過程の定量的な議論は、乱流混合の議論と切り離すことはできない。本セッションでは、乱流混合をキーワードとして、関連する物理、化学、生物の講演を広く集めることで、それぞれの理解を深め、また分野を横断した今後の研究の進展をはかる場としたい。	原田尚美(JAMSTEC)、 西岡純(北大低温研)
16S19	プランクトンの分布と多様性	生物	対象海域は限定しない	多様性、プランクトン	浜崎恒二 (東大大気海洋研)	どこに、どのような種がいて、その分布を決める要因は何か。海洋におけるプランクトンの分布や多様性研究は、種の記載に始まり古くから行われてきた。近年、衛星観測や自動観測データの蓄積、DNA/バーコーディングと呼ばれる新たな種同定技術の導入などにより、こうした研究が海盆スケール、全球スケールで展開されるようになってきた。このセッションでは、微生物から動物プランクトンまで、海洋のプランクトンに関する研究を「多様性」の視点から俯瞰することにより、新たなプランクトン研究の方向性を探る。多様性、群集構造の時空間変動パターンと変動機構、各種の変動を決める要因、捕食-被捕食関係や寄生・共生関係を含む生物間相互作用など、遺伝子から生態系レベルまで分布や多様性そのものの記述に加えて、これらを左右するメカニズムに関する研究を中心に構成する。	津田敦(東大大気海洋研)、 鈴木光次(北大地球環境)
16S20	海洋酸性化の現状把握、将来予測と生態系への影響評価	境界・複合領域	全球	二酸化炭素、海洋酸性化	芳村毅 (電中研)	海洋酸性化は大気CO2濃度の増加により引き起こされる新たな環境問題として認識されつつある。表層海水のCO2分圧は大気CO2濃度と同程度の速さで増加していることが明らかとなっているが、海域や深度による海洋酸性化の進行度の違いに関する知見は不足している。また、IPCC AR5では海洋酸性化の生物影響に関する最新の知見が取りまとめられたが、生物への影響を総合的に理解する上では知見がまだ十分ではないことが示された。そこで、海洋酸性化の現状や将来変化を把握する観測・モデル研究や生物影響を把握する飼育・培養実験研究から得られた最新の知見を発信し、新たなアイデアの創出や研究者間の連携強化に寄与するとともに、学会員が研究の現状を把握できる場を提供する。	藤井賢彦(北大地球環境)、 小笠恒夫(中央水研)

16S21	微量元素・同位体の生物地球化学	化学	全球	微量元素・同位体・物質循環	小畑元 (東大気海洋研)	近年のクリーン技術・分析技術の進歩により、海水中の微量元素・同位体に関する研究は大きく発展した。世界的に見ても、国際GEO TRACES計画の下、様々な成果が挙げられている。鉄などの微量元素の循環は、海洋生物生産にとっての微量栄養塩として重要である。また、微量元素の同位体組成は水塊のトレーサー、古海洋研究のためのプロキシとしても注目が集まっている。本セッションでは海洋における微量元素・同位体の生物地球化学に関わる幅広い研究を受け入れ、化学・物理・生物の研究者間の情報交換・交流の場を提供する。さらに、次世代の海洋化学の発展を目指す。	大木淳之(北大院水産)、 近藤能子(長崎大水産)
16S22	沿岸域における放射性物質の動態解析と分散予測	境界・複合領域	内湾・沿岸域、瀬戸内海、親潮域、混合域、黒潮	福島第一原発事故、放射性物質、海洋分散、海生生物	津旨大輔 (電中研)	福島原発事故後、海洋へ供給された放射性物質の動態に関する調査が実施されるとともに、その分散過程を再現、予測する数値計算も行われた。沿岸スケールの動態において、現在でも直接漏洩および河川からの供給は継続しており、観測およびモデルの双方からの検討が行われている。また、沿岸域における海水から海生生物への移行過程のモデル化や他の沿岸域への展開についても検討されている。本セッションでは、沿岸スケールの観測およびモデリングの双方から福島原発由来の放射性物質の海洋中、海生生物中の動態を把握すること、それらの知見をもとに日本周辺の他海域の放射性物質による汚染評価を行うための数値モデリング研究の現状を把握することを目的とする。	立田穰(電中研)
16S23	「海底堆積物における放射性核種の存在量の分布特性とその変動要因解析」	境界・複合領域	内湾・沿岸域	放射性セシウム、移動性、溶出性、存在形態	長尾誠也 (金沢大)	福島原発事故後に実施された調査により、宮城県・福島県・茨城県・千葉県沿岸域にかけての海底堆積物では、浅海域に高濃度の観測地点が存在し、時系列で大きな変動が認められた。現状の正確な理解と今後の変動傾向を把握するためには、河川からの継続的な放射性核種の流入も含めた変動要因の解明・変動量の定量評価・生物への影響評価が必要不可欠である。本セッションでは、河川による陸起源粒子の負荷の影響や海底堆積物の移動性、溶出性、さらに生物濃縮に関する研究成果を通して、沿岸域海底堆積物における放射性核種の動態を理解することを目的とする。また、事故初期から現在までの海底堆積物中の放射性核種の水平分布を海域毎に評価する。	乙坂重嘉(原研)、 嶋山秀樹(中央水研)
16S24	東日本大震災・福島原発事故の広域で長期におよぶ影響	境界・複合領域	太平洋	放射性元素、海洋大循環、物質循環、生体回遊	池田元美 (北大院地球環境)	東日本大震災は、津波の甚大な被害に加え、福島第一発電所の原子炉崩壊が長期間に渡って海洋を基盤とした人間活動に大きな影響を与えた。ここでは、震災に関するセッションの中で、沿岸域および海底土に重点を置いた2セッションとは別に、太平洋全域に拡がりつつある放射能汚染について、4年を越える研究成果の総括、未解明の現象への取り組みなどの研究発表を行う。具体的には、大気放出直後の広域拡散、北太平洋に拡がる汚染、生物濃縮し水産物に残存する汚染、漂流物の分布状態を取り上げる。また市民社会との情報交換など、発表に相応しいと考えられる発表は、上記の例に限らず本セッションに含める。	未定

16S25	海洋プラスチック汚染・漂流漂着ゴミ問題	境界・複合領域	全球、内湾・沿岸域	モニタリング、モデリング、環境影響評価	磯辺篤彦 (九大応力研)	<p>先のG7首脳宣言にも盛り込まれるなど、社会的関心が世界的な広がりを見せている海洋プラスチック汚染や漂流漂着ゴミの科学について、包括的なセッションを提案する。マクロ・メソ・マイクロプラスチックの輸送過程や、これらに伴うPOPsや有害金属の輸送、また海洋生態系への影響に関する、海洋物理学や環境化学、あるいは海洋生態学など、多方面からのアプローチを概観できるセッションにしたい。さらに、プラスチックに限らず、漂流漂着ゴミのモニタリングやモデリングに関する最新の研究成果や、新たな手法提案を歓迎する。なお、セッションの冒頭には、これまでの内外の研究成果をレビューする講演を予定している。</p>	東海正(東京海洋大)、高田秀重(東京農工大)、日向博文(愛媛大)
-------	---------------------	---------	-----------	---------------------	-----------------	---	----------------------------------